
悪魔と水平思考

蝉ノ河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と水平思考

【Nコード】

N4295L

【作者名】

蟬ノ河

【あらすじ】

悪魔と水平思考の問題で勝負することになった少年。

悪魔が水平思考の問題を7つ出す。

それに少年は7回質問するまでに、正しい回答を導き出さねばならない。

もし少年が負ければ、少年は体を7つに分割されて死んでしまうのだ。

少年は見事、悪魔を負かすことが出来るのか？

練習問題『俺はミート君?』

水平思考というクイズをご存知ですか？

有名な問題は『海がめのスープ』です。

『レストランで海がめのスープを飲んだ者が、海に身を投げて死んだ。なぜか?』という、これだけの情報では絶対に解けない問題を、回答者が幾つか質問することで情報量を増やして解く形式のクイズです。

「了解した」

ほほほ、これは理解が早い。

「水平思考なら、元から知ってる」

それは素晴らしい。あと本来はYES、NO、関係ない、の3種類で質問に回答するものですが、今回は1対1で質問者が少ない。特別に3択の質問もありというルールを追加しましょう。

「わかった」

更にもう1つ。ご存知でしょうが、この水平思考はいくつでも質問を許しては興ざめです。質問は7つまで。これが絶対のルールです。

「なぜ7つだ?」

右腕、右足、左腕、左足、胴体、腰、頭。合計で7つです。

7つ質問しても問題に正解できなければ、体をその7つを切り分けて差し上げます。

「体が7つにバラバラって、俺はミート君かよ」

それは何ですか？

「ああ。ジャンプの……っと、俺が出題者になっていいのか？」

ほほほ。このわたくしを前に、いきなり自身が出題者たらんとする人間は初めてです。

ですが貴方が水平思考を理解しているかを確認するいいチャンス。練習問題としてお受けいたしましょう。

「じゃあ質問は6つか」

質問数を削るとは。大胆なわりに、心が狭い。

「お前、頭がないじゃないか」

ないとは失礼な。わたくしの頭は、わたくしがちゃんと持っているでしょう。この悪魔随一の美貌を持つわたくしに対して失礼千万です。

「確かに持ってるな。二重の意味で。ああ、ウィンクしないでいい」

ほほほ。照れなくとも結構。

ですが質問は7つ。ルールを間違えないように。

「了解。じゃあスタートだ。質問、どうぞ」

またしてもルール違反。まだ問題文を聞いておりません。

「わかったよ。『体を7つに分けられると、俺は「ミート君だな」と言った。その意味を答えよ』」

ほほほ。まるで理解できませんね。これぞ水平思考。答える側は初めてです。股間がゾクゾクとしてきました。

「無駄口を叩くな」

ほほほ。興奮する若い雄は可愛らしい。お尻が内側から熱くなります。

「……それが質問だな。尻が熱くなるか。答えは……」

ストップ！ 可愛い顔をして容赦がない。わたくし好みです。ですがその回答はご勘弁を。

「早く質問をしろ」

ほほほ。これほどまでに度胸がある人間は久しぶり。股間が……、無限にループしそうなのでここで切りますか。

では1つ目の質問。ミート君とは名前ですか？

「そうだ」

2つ目。ミート君とは機械など無生物か生物ですか？

「……2択の質問はありなのか？」

3択がありなのだから、もちろんあります。

「わかった。生物だ」

3つ目。ミート君は実在する人間ですか？

「違う」

ほほほ。では架空の人間ということですね。漫画か、小説か、アニメあたりですか。しかしだとすると可能性も広がります。

4つ目。ミート君は体を7つに分離する能力を持っていますか？

「いいや、持っていない」

5つ目。ミート君は何らかの事故か災害に巻き込まれて、体が7つに引き裂かれた？

「……いいや。事故や災害ではない」

ほほほ。かなり絞れましたよ。

6つ目。では7つに分けれる能力を持った何者かが、ミート君を7つに分離した？

「そうだ。バッファローマンがやった」

ほほほ。質問を1つ余らせてしまいましたが、もうよいでしょう。回答します。

ミート君はバッファローマンによって体を7つに引き裂かれた物語上の人間。今回、水平思考に負けたら体を7つに引き裂かれることになぞらえて、貴方は自身のことをミート君と言ったのでしよう。

「正解。と言いたいが、ハズレだ」

なんと？

「ミート君は超人だ。人間じゃない」

ほほほ、なるほど。早合点でしたか。架空の世界は奥深い。ミート君は『実在』していなく、更に『人物』でもなかったのですね。

「そうだな」

これは失敗。きちんと1回質問をして確認するべきでした。意外と面白い問題でしたね。でも本来は、そういう一般的ではないお話からの出題はNGですよ。

「キン肉マンは一般常識じゃないのか？」

わたくしは知りませんでした。

「わかった」

それなら結構。しかし練習問題とはいえわたくしが敗れたのは事実。ボーナスとして、わたくしの頬に接吻しても良いですよ。

「いらん」

ほほほ。唇がよい、と。人間は相変わらず罪深い。

「そっちもいらん」

なんとも無欲な。いやこれは、わたくしの女心を傷つけて動揺を誘う高度な心理戦と見ました。人間よ、まだまだ甘いと言っておきましよう。

「別にどっちでもいい。早く始めろ！」

ほほほ。強がりもまた、可愛らしい。

では本番を始めましょうか。

1 問目『彼女はなぜ殺した?』

ではいよいよ水平思考のゲーム開始です。

「いつでもいいぞ」

自信満々ですね。ですが少年はいつもそうってコンドームの付け方を誤るのです。ホントに大丈夫ですか？

「いつでもいいから、早くしろ!」

ほほほ。すでにわたくしのペースですね。勝ちを確信しました。

では問題です。

『彼女は子供たちの為に、子供たちの父親を殺しました。状況を説明しなさい』

さあ、お答えください。質問は7つまで。YESか、NOか、関係ないでお答えします。3択の質問もお答えしましょう。

「聞いた限りだと、間違いなく虐待が行われているな」

では質問なさいますか？

「いや、その答えは絶対ないだろうから、いい」

ほほほ。当たり前であり得る状況を、あえて考慮から外して質問数を節約するとは。やりますね。ですが石橋を叩いて渡るといふことわざもありますよ。

「それを聞いて、ますます聞く必要を感じなくなった」

そうですか。

「1つ目の質問。子供たちは、彼女の本当の子供か？」

なるほど。それは確認の必要を感じましたか。ですが残念。子供たちは間違いなく、彼女の子供であり、殺された父親の子供です。

「2つ目の質問。子供たちは、父親を殺されて喜んだ？ それとも悲しんだ？」

ほほほ。どちらでもありません。あとそれは関係ありません。

「子供たちの感情は関係ないのか。じゃあ子供たちは、父親が死んだことを知らなかった？」

……はい。

「じゃあ母親がそれを隠した……いや、待て。これじゃ質問数がいくつ合っても足りないな」

ほほほ。わかりませんよ。

「3択はいいんだな。これを有効に使うしかないか。じゃあ子供たちが父親が死んだことを知らなかった理由を3択で質問する。1、母親が隠した。2、他の誰かが隠した。3、誰も隠さなかったが子供は知らなかった」

ほほほ、なるほど。そうしますか。でもその質問は関係ありません。

「むむ。この質問が関係ないのか。どういう状況だ？」

わからないからこそ、問題なのですよ。3つ目の質問を使い果たよ。あと4つ。

「わかっている。4つ目の質問で、父親が殺された子供たちの年齢を3択で聞く。1、5歳未満。2、20歳未満。3、それ以上」

ほほほ。どれもハズレです。

「なんだと!？」

嘘はついておりませんよ。

「当然だ。5つ目の質問。父親が殺された当時、子供たちはまだ生まれていない?」

はい。

「……そういうことか。いや、しまった! この質問に意味はない」

ほほほ。愚かな確認作業に、貴重な質問を使ってしまいましたね。あと残りの質問数は2つです。

「くそ……。いや。子供たちが既に死んでいる可能性は潰せたな。まんざら無意味な質問じゃなかったか」

ほほほ。自分を慰める行為と書いて『自慰行為』と読みます。その愛すべき単純作業をここでスタートするですか？

「黙れ！」

では黙りましょう。そちらは質問をどうぞ。

「なにか重要な事実がまだ出せていないな。なにかが抜けている気がする。問題をもう一度確認するぞ」

いいですよ、何度でも。

『彼女は子供たちの為に、子供たちの父親を殺した。状況を説明しなさい』

ほほほ。なにかわかりましたか？

「……子供、たち。たち。複数。なぜ複数だ？　なぜ『子供』ではない？」

それは質問ですか？

「違う。……6つ目の質問。子供たちの人数を3択で聞く。いや違う。子供たちの『数』を聞く。1、10以下。2、100未満。3、100以上」

ほほほ。3です。

「100以上。彼女の本当の子供たちが。100以上。明らかに彼女は人間ではないな。動物の、それも哺乳類や爬虫類でもない。両生類か魚。……もしくは、虫。父親を殺す習性を母親が持つなにか」
ほほほ。独り言が長いですね。最後の質問を聞きましょう。

「母親の生物学上の分類を聞く。1、魚類。2、両生類。3、昆虫類」

3です。

「ようやく真実を掴んだぞ。これなら子供が生まれていなかった理由も説明がつく」

自信満々ですね。思い込みでなければよいのですが。

7つの質問に全て答えましたので、回答を聞きましょう。

「カマキリは交尾した後、時としては交尾の最中にでもオスを食い

殺して、栄養を取ってから卵を生む習性がある。これはそのことを言っているのだろうか？」

ほほほ。無駄な質問をいくつもしたので勝利を確信しましたが、実際はそうもいかないようですね。

「正解なんだな？」

はい。ファーストステージクリアです。ボーナスとしてわたしのおヘソを見る権利を上げましょう。

「いらん。しかし危なかった。昆虫だったから、後家蜘蛛の選択肢も消えた。ラッキーだったな」

運のよさも魅力の1つですよ。

「あと6つ問題に正解すればいいんだな？」

はい。あと6つ正解できたら、貴方の望みは叶います。それはお約束しましょう。正解できたら、の話ですが。

「十分だ。次の問題を出せ」

ほほほ。焦らないでください。そう興奮せずに。がつつかずに。女の扱いは丁寧。まずはシャワーを浴びて汗を流してからが順序というものでしょう。

「……早くしろ」

ジョークの通じない方ですね。それもまた可愛らしい。

では次の問題です。

2問目『誰が喜び、誰が悲しみ、誰が死んだ?』

2問目の水平思考クイズです。

7つ質問して、答えを出すルールは変わりませんよ。

「ここで変わったら困る」

それもそうですね。では始めましょう。

『あるところに4人の人間がいました。1人が死んだ時、2人は喜び、1人は泣きました。2人目が死んだ時は、2人とも泣きました。3人目が死んだ時、残った1人は泣き続け、やがて死んでしまいました。状況を説明しなさい』

「またブラックな話か」

悪魔ですから。お嫌いでしたか？ ではご希望にお答えして、せめて服装だけでもサキュバスのにしましょう。

「脱ぐな！ いつそんなことを希望した」

ほほほ。貴方が大好きな、未成年立ち入り禁止ゾーンへの招待状

ですよ。

「だから希望していないと言ってる」

それは残念。ではそろそろ最初の質問を伺いましょうか。

「わかってる。1つ目の質問、これは現代の話か？」

関係ありません。まあ現代と仮定しても良いでしょう。

「関係ないか。じゃあ2つ目の質問は登場者4人の関係を3択で聞く。1、その4人は友人である。2、家族である。3、赤の他人である」

2番です。いい質問ですよ。

「……いい質問なのか。いや、この部分に嘘を混ぜている可能性もあるか」

ほほほ。それは考えすぎです。いい質問は、本当にいい質問です。わたくしは嘘はつきません。

悪魔とはいえ、それは信用してください。

「わかった。家族であることが重要なんだな。じゃあ3つ目の質問。初めに1人死んで、2人が喜んだな。2人はその死でなにか利益を得たから喜んだのか？」

歪んだ家族観をお持ちのようで。

「質問に答えろ」

YESです。2人は初めの死によって、莫大な利益を得ました。

「とすると、利益の内容はおそらく遺産だな。確認するべきか……」

ほほほ。貴方の知恵と度胸と陰茎の大きさが試されますね。

「最後のは関係ないだろ！ わかった。質問はしない。質問が余ったら確認をする」

意外な短小ぶりを見せつけられてしまいました。ですがご安心を。わたくしは陰茎の大きさを男性を評価したりはしません。

「五月蠅い。……あと短小というな。俺のは普通だ」

見せていただけのままで、信用はいたしません。陰茎についての自己申告には何度騙されたことか。さあ、お見せください。

「見せるか！ くそ、落ち着け。相手のペースに乱されるな」

ペニスがどうかしましたか？

「黙れ！ 4つ目の質問、初めの死者が出た時に喜んだ2人は、愛し合っている夫婦か？」

はい。2人はラブラブでした。夫が望むのならば、妻は裸エプロンもいとわぬ程に。妻が望めば、夫は王子様プレイもしてあげました。

「その情報はいらん。愛し合っている夫婦か。なら3人目の死者は、残された1人の後追い自殺か……」

ほほほ。それは質問ですか？

「独り言だ。どちらにせよ、重要なのは2人目の方だな。5つ目の質問。2人目の死因についてを3択で聞く。1、殺人などの人為的な死。2、病気などの自然な死。3、寿命」

2番です。2人目は病死しました。ちなみに夫です。

「病死か。これでかなり絞られた。あとは最後に残った1人の素性だ。6つ目の質問で、最後の1人の年齢を3択で聞く。1、5歳未満。2、20歳未満。3、100歳未満」

1です。彼は2歳児でした。

「赤ん坊だな。初めからずっと泣いてるはそういう訳か。7つ目の質問……最後の質問だ。その家は外界から隔絶していて、赤ちゃんが泣いても誰も助けに来ない？」

はい。山奥にある館でしたので、赤ん坊の泣き声はどこにも届きません。

「大まかにはわかった。3人目の死因が手付かずだが、おそらく問題ない」

左様ですか。こちらでも7つの質問にお答えしました。回答をお聞きいたしましょう。

「その4人は家族。遺産を持った老人と、その相続権がある夫婦と、夫婦の子供の赤ん坊。初めに老人が死んだ時には、遺産が入る為に夫婦は喜んだ。だが夫が病死してしまい、愛する者を失った悲しみの余り、妻は後を追って自殺してしまった。残された子供は泣き続けたが、山奥だったので誰も助けにくれる者がおらず、やがて餓死で死んだ」

ほほほ。所々、情報が適當ですね。妻と赤ん坊の死因は、完全にあてずっぽうでしょう。

「はずれか？」

……ですがこの問題の肝である遺産問題と、愛情の喪失、それに赤ん坊が死に至った原因を確定させています。認めざるを得ません。

正解です。

「ふう、ようやく2問目をクリアーか」

ほほほ。かなりギリギリでしたが、まあオマケです。

「ありがとうとでも、言えばいいのか？」

感謝のしるしはセクハラで返させて頂きます。

とりあえず目を瞑って、両手を頭の後ろで組んで、足を開いて直

立不動しなさい。10分間は何があっても動いてはいけませんよ。

「何をする気だ?! 断る!」

ほほほ。ではそれは後ほどの楽しみとしておきましょう。

3問目に参ります。

3問目『無罪の罪により死刑!』

3問目、参りますよ。

「かかって来い」

『彼女は罪に問われましたが、自分の無実を証明しました。しかし彼女は死んでしまいました。状況を説明しなさい』

「いつでも誰かが死ぬんだな？」

ほほほ、悪魔ですから。まあ次は違う系統の問題にしましょうか。これが正解できたら、ですが。

「できるさ。1つ目の質問、彼女は人間か？」

はい、人間の女性です。30代の女性と仮定しましょうか。しかし警戒しますね。

「母親がカマキリだったりすると、前提が全て崩れるからな」

ほほほ。1問目を引っ張りますか。たとえばカマキリでも、雌ならば股間がいきり立つという野獸的生殖本能はないのですか？

「あるはずないだろ。というか、いくらなんでも昆虫類は変態の域も超えてる」

昆虫は変態、と。二重の意味をもたせましたね。なかなか言葉が巧みだ。

「両方ともこの場では無意味だけだな。2つ目の質問、彼女は本当に無実だった？」

はい。彼女は正真正銘、無実でした。

「無実の罪に問われていたのか。彼女の罪名と死と、どっちを優先するべきか……」

女は常に罪作りなのですよ。わたくしのように美しい女は特に。

「黙れ。3つ目の質問で、彼女を殺した犯人を3択で聞く。1、赤の他人。2、知人。3、家族」

ほほほ。どれでもありません。

「なに？ 彼女が死んだのは、殺人にあったわけじゃないのか。じやあ4つ目の質問。彼女が死んだ理由を3択で聞く。1、事故死。2、病死。3、……自殺」

無理やりに3を付け加えましたね。

「まあな。2択で聞くよりも、3択の方が情報量が増えて得だ」

確かに。そしてクリティカルヒットです。答えは3です。彼女は自殺しました。

「なんだと？」

彼女は助かることが出来たのに、あえて死を選びました。つまり自殺です。

「無実を証明したのに、自殺した。どういう状況だ？」

それが問題ですよ。さあ、5つ目の質問は？

「無実を証明する過程が物凄く恥ずかしかったから、自殺？ 中東圏だと、そういうこともありえるか？」

それが5つ目の質問ですか？

「待て。うーん。そういえば、いつも聞いている質問をまだしていなかったな」

なるほど。しかし何度聞いたところで、残念ながら、わたくしは非処女です。

「いつ聞いた！ 一度も聞いてないだろ。あと今後も聞く気はない。5つ目の質問。これは現代の出来事か？」

ほほほ。NO。これは現代の出来事ではありません。そして非常に良い質問です。

「ようやく尻尾を掴んだ。現代でなくて、無実の証明によって自殺

か……。なんというか、ほぼ問題の全容を掴んだ気がする」

では回答を。

「いや。あと2回は質問できるのだから、質問はする」

ほほほ。私を嬲るのですね。どうぞ、ご存分に男女男^{なぶ}りなさい。

「へんな言い方するな。6つ目の質問。これは中世のヨーロッパの出来事である」

YES。一枚一枚、服をはがされている気分です。

「感想はいらん。彼女は魔女の嫌疑をかけられていた？」

YES。もはや丸裸です。さあ、回答をどうぞ。

「彼女は中世欧州で流行った、魔女狩りの被害者だ。魔女の嫌疑を晴らすには、水に入って浮かんでこないなど、対象の死を要求するものが多い。というか、ほぼ全部そらしいな。彼女は魔女ではないことを見事に証明したが、結果として彼女は死んでしまった」

見事です。特に最後の2問の鬼畜っぷりが堪りませんでした。

「鬼畜って、何だよ」

すでに回答に行き着いているにもかかわらず、質問権を盾にわたくしに辱めを。

「確認しただけだ。これで3問正解。あと4問だな」

はい。

「……あと4問回答できれば、俺の望みが叶う。この部屋の外がどうなっているのか教えてもらえるのだな？」

はい。ですがこのゲームが終わるまで、部屋の外に出るのはNGですよ。死んでしまいますから。

「部屋を出ると死ぬのか」

はい。

「それだけは確実なんだな」

はい。ですから貴方も、わたくしの提案に乗って、このゲームをしているのでしよう。

「それはそうだが。なぜ死ぬかは、教えてくれないんだな」

残念ながら。その質問には、7つの問題を回答した際にお答えしましょう。

では4問目です。

4問目『わたしは誰?』

では4問目です。ご期待に応じて、今回は誰も死にません。

「ありがとよ。血生臭いのは好きじゃないんだ」

わたくしもです。趣味が一致しましたね。結婚しましょう。

「ふざけるな!」

残念。ですが貴方の要望を1つ聞いたので、こちらからも1つございます。

「なんだ?」

今回より、質問に3択は不可です。

「なにい?」

便利すぎて、頼っているように思えますので。

「それはそうだが。頼って悪いのか? 3択質問がだめになるくらいなら、問題文で何人死んでもかまわん」

ほほほ。墮落を覚えてはいけません。少年が墮落すると、すぐにオナニー猿になってしまいますから。

「いや、それは関係がないだろう」

ともかく男子たるもの、一度口から発した言葉を、やすやすと引っ込めるものではありません。大きくなれませんよ。この短小。

「うるさい！　っていうか、言いすぎだろ。あと関係もないし」

ともかくダメです。今回から、質問には、YESか、NOか、関係ないで答えます。ああ、質問の数は7つで変わりません。

「くそ。わかった」

よろしい。では4問目です。

『わたしは非常に強いです。ただ実力が伯仲する者がいます。しかしその者にも、速さでは勝ちました。わたしは誰？』

「わたしってのが、何者かを当てればいいんだな？」

よくお分かりで。

「じゃあ1つ目の質問。『わたし』は実在するか？」

YES。なるほど。そこから気にしますか。

「実在する、と。なら2つ目の質問。『わたし』は人間か？」

NO。人間ではありません。警戒されてしまってますね。

「母親が昆虫なのは、インパクトが合ったからな」

ほほほ。そうですか。

「それにしても人間以外か。哺乳類か爬虫類か。また昆虫という可能性もあるが……。3択の質問なしで詳しく調べると質問が足りなくなる。追求は断念だ」

ほほほ。早々と諦めますか。まだ奥まで届いていませんよ。

「うるさい。3つ目の質問だ。『わたし』と『実力が伯仲する者』は、ほんとに互角か？」

関係ありません。ただ実際のところ、どうなのか。本当に互角かは知りません。

「関係なし、か。4つ目の質問。『わたし』は『実力が伯仲する者』に、ホントに速さで勝った？」

NO。

「……くそ、追加情報はなしか」

ほほほ。そうそう女が男に甘い顔をすると思ったら大間違いです。

「そうかい。くそ、しかしわからん。なんなんだ？ 4つも質問を使って、まだ何も分かっていない。明確な情報は『わたし』が実在

するくらいか……」

悩みますね。しかし悩んで解決する問題ですか？ 『書を捨て町に出よ。そしてソープに行け』とは誰が言った言葉でしたか？

「後半はお前が付け足したろう。うーん、と。いや、まだ万が一のことがあるから、確認が必要か」

確認しますか？ ソープに行ったかどうか否かを。

「違う！ 5つ目の質問。『実力が伯仲する者』は、実在するか？」

NO。ほほほ、お気づきになりましたか。非常に良い質問です。

「ようやく真実に少し近づけたな。片方が実在し、片方が実在しない、か。しかし競争している。……6つ目の質問。神話や昔話は関係あるか？」

YES、関係あります。昔話か、まあ逸話ですね。

「逸話か。よし7つ目の質問。最後の質問だ。これは日本の話か？」

YES。これは日本の話です。

「よし。日本の話で、実在する者と実在しない逸話のみの者が、速さを競った話。しかし実力が伯仲している、と」

すべて質問が終わりましたが、答えはわかりましたか？

「際どいところだったが、最後でなんとかな」

では答えていただきますよう。

『わたしとは虎のことだ。ついでに『実力が伯仲する者』とは竜のこと。竜虎相打つとか言うしな。実力は伯仲している。でも干支の競争では虎が3番で、竜は5番だったから、速さでは勝ったと言っているんだろう』

正解です。よくわかりましたね。

「最後の質問で、日本の話と当てられたから助かった。やっぱり3択がないと厳しいな」

ほほほ。泣き言を言うのはおよしなさい。もしくはわたしを泣かせなさい。ベットのうえで。

「黙れ！ 次の問題にいくぞ。さっさと当てて、ここから出してもらうからな」

結構です。ただ「出してもらおう」といわれても困ってしまいます。誤解がないように言っておきますが、貴方をここに入れたのは、わたくしではありませんよ。

「……なに？」

わたくしはあくまで親切に……「悪魔があくまで親切に」って、ちよっと駄洒落が入ってしまったね。ほほほ。恥ずかしい。お詫びにオッパイを揉んでもかまいません。

「続きを言え！」

そうですか……。ともかくわたくしは親切で「この部屋から出たら死にますよ」と、貴方に教えてあげたのです。あくまでサービス。善意です。

「お前がこの部屋に、俺を閉じ込めたわけじゃないのか？」

そうです。

「じゃあこの部屋に俺を閉じ込めたのは誰だ？」

ほほほ。さて、誰でしょう。それに貴方は閉じ込められてもいませんよ。いつでも出られます。ただし、出たら死にますが。

「……そうか。つまり答える気がないんだな」

今は。です。女に真実を言わせるつもりならば、それ相応の力を見せていただかないと。あと3つ、真実の解答をいただきとうございます。

「わかった。問題を出せ」

では5問目。参りましょうか。

5問目『威嚇する者』

5問目です。今回もルールに変更はありません。わたしの問題に対して貴方は7回質問をする。わたくしはそれにYES、NO、関係ないでお答えします。もちろんわたくしは嘘をつきません。

「今回も3択の質問はなしか」

もちろん。一度ハードルがあがれば、もはや後戻りはできません。女性へのプレゼントと同じです。

「ふーん」

覚えておくとよいですよ。

「どうでもいい。さっさと問題を出せ」

ほほほ。焦りはED（勃起不全）の始まりですよ。まあこれ以上じらすのも少年には酷と言うもの。問題をお出ししましょう。

『彼は武器を見せつけて、彼に向かってくる者を威嚇しました。状況の説明しなさい』

「それだけか？」

はい。5問目らしく、少しかだけハードルをあげました。もちろん意味がある言葉ですよ。

「うーん。わけがわからない。わからない過ぎる。だが『彼』とか不確定な代名詞が出てくると、そいつが人間かどうかを怪しんでしまふな」

ほほほ。まさにこちらの思う壺。ところでつぼ洗いという行為をご存知ですか？

「……壺を洗うのだろう」

浅はかな。己の無知を誇示していますよ。正解はもっとエロ方面です。

「知るか！ 興味も無い」

残念。では初めのご質問を。

「ふん。じゃあ1つ目の質問。彼は人間か？」

NO。彼は人間ではありません。ほほほ。やはり引っかけかりませんか。

「問題がワンパターンなんだよ。ずっとグーを出し続けるジャンケンみたいだ」

しかし確認せずにはいられなかった。

「……それはそうだが」

ならば十分です。質問を1つ使って頂きましたので。

「ふん。しかし人間以外か。人間以外。ちょっとは範囲が広いな。だが……絞り込むのは3択なしだと厳しい。3択があればな」

ほほほ。もはや無くなった3択という選択肢を追い求めるとは。貴方を嫌って去っていった女を追いかけるように愚かな行為ですね。

「うるさい。2つ目の質問、これは神話とか超自然的な現象は関係あるか？」

NO。関係ありません。

「外したか。なら3つ目の質問。これは現代の話か？」

ほほほ。NOです。ですがほとんど関係ありませんよ。現代でも起こりえることですから。

「むう。これも関係なしか。なら持っている武器を絞り込むか。人間以外なら、可能性があるものは少ない」

そう思うのは貴方の自由です。人には想像する自由とがあります。オナニーはし放題ですよ。

「黙れ。4つ目の質問だ。彼の武器とは、向かってくる者を殺傷しえる威力がある？」

NO。そんな力はありません。

「猿や類人猿が武装している可能性は排除できたか。殺傷能力の無い武器……。牙とか爪も武器に入るか」

ほほほ。まあ入るでしょうね。

「……珍しいいな。質問を使わないで答えてくれるなんて」

お互いの常識を確認する類の質問でしたから。わたくしは牙や爪も、武器に入ると考えていますよ。問題に関係があるかないかは別ですが。

「そうか。5つ目の質問。その武器は、彼の肉体の一部か？」

YES。ほほほ。貴方は今、とてもよい質問をしました。

「これがいい質問なのか。武器が肉体の一部。絞れてきたな。牙か爪か。尻尾というのもありえるか」

ありえますよ。関係があるかは別の話ですが。

「ふん。関係あるかは気にはなるけれど、質問が残り少ない。最後に残った不明な名詞に取り掛かろう。6つ目の質問。『彼に向かってくる者』とは人間か？」

YES。あくまで登場者の生物学的分類にこだわりますね。

「当たり前だ。これを確認しないと、すべての前提が崩れるからな」

ほほほ、しかしもう残りの質問は1つですよ。

「わかっている。ラストの質問でいっきに核心を捕まえるから待っている。情報を整理する」

どうぞどうぞ。わたくしも生理をいたします。

「すんな！」

ほほほ。何を怒鳴っているのですか。わたくしはこの部屋を整理すると言っただけですよ。

「……わかった。好きにしてろ」

ほほほ、やめときます。

「くそ。変なことに脳を使ってしまった。えーと。まずは問題の確認だ」

はい。どうぞ。

『彼は武器を見せつけて、彼に向かってくる者を威嚇しました。状況を説明しなさい』

「……既に得ている情報は多い。彼は人間以外。相手は人間。人間以外が、人間に対して肉体の一部の武器を使って威嚇した。しかし

武器に殺傷能力は無い」

整理できましたか？

「出来たが……。帰宅した主人に、ペットの子犬が泥棒と間違えて威嚇した？　これならば状況の説明はつく」

そうお思いですか。では最後の質問で確認をして下さい。

「……彼はペットで、人に飼われている？」

NO。違います。彼はペットではありません。

「つつ！　違ったか。くそ、痛恨の質問ミスだ」

ほほほ。予想をはずしたようですね。いよいよ貴方の7分割処刑ショーが見られますか。わたくし。年甲斐も無く濡れてしまいそうです。

「うるさい。まだ答えを外したわけじゃない」

そうでした。ではお答えを。

「……少し考える。何か情報を聞き忘れてないか。何か……」

もう質問は残っておりませんよ。

「……」

無心で考える少年は美しい。この姿ともうすぐお別れなのです

ね。

「……この話は現代ではないが、現代でもありえる話なんだな」

そうです。そう答えましたよ。

「しかし神話でも御伽噺でもない」

そうです。それも答えました。

「現代に起こったことではない。だが現代でも起こり得ること。つまり過去に起こった事実で、現代も起こる可能性があること」

そうなりますか。

「そして初めに言ったな。これは意味がある言葉だと」

よく覚えておりましたね。確かに言いました。

「つまり諺とか、何かの語源か？」

ほほほ。そう考えるのは勝手です。

「『飼い犬に手を噛まれる』は排除できてる。ペットじゃないし、怪我もしてるからな」

そうかもしれませんが、そうじゃないかもしれません。

「……なら『あれ』だ。『あれ』ならすべての要件を満たす。……たぶん。くそ、なぜここにもっと早く辿りつけなかったんだ。もう

1つだけ質問が使えれば、確実に答えがわかるのに」

大雑把にでも答えには行き着いたようですね。お答えを。

「確信を持ってないが、答えるぞ。もうこれしか思いつかない」

どうぞ。

『彼はカマキリ。向かってくるものは人間。カマキリが武器、つまり鎌を人間に見せ付けたんだ。つまりこれはことわざの、螭螂の斧だ』

ほほほ。本当に運のいい人だ。

「当たっているのか？」

正解です。これは確かに『螭螂の斧』を示しています。まさか当てられるとは思いませんでした。

「当たったか……」

首の皮一枚繋がりましたね。

「くそ。初めの雑談でに重要情報が隠れていたなんて。汚い手を使いやがって」

ほほほ。面白いことをおっしゃる。わたくしは嘘をつきません。その嘘をつかないわたくしが問題について語るのですよ。むしろ重要情報と思わない貴方の方がおかしい。

「それはそうだが。カマキリの問題が2度も来るとは思わなかった」
ワンパターンだと先ほどわたくしを口汚く罵った貴方のセリフとは思えませんね。

「……つまり俺はいいように踊らされたということか」

ほほほ。まああまり後悔なさる必要はありません。失敗しても、貴方が死ぬだけです。わたくしに被害はありませんので。

「死んでたまるか！」

気迫は十分ですね。思考にもその意思が通ずればよいのですが。

6 問目に参りましょう。

6問目『素早い狼』

では6問目にまいりましょう。

ルールに変更はなしです。わたくしが問題を出し、貴方が7回質問をする。質問にはYES、NO、関係ないで答えます。もちろん嘘はつきません。貴方はそれを聞いて、問題に解答する、と。

「すべて今までと同じだな」

はい。そしてご存知の通り、回答を誤れば、貴方の肉体を7等分に分けて命を頂きます。

「わかった」

宜しい。では問題です。

『その狼は非常に速いです。説明しなさい』

「それ、だけか？」

はい。……とと、質問でもないのに答えてしまいました。貴方のホストトークにまんまと乗せられてしまいました。

「乗せたつもりはないが。しかし訳の分からなさが増しているな」

もう6問目ですよ。難易度は上がります。

「わかった。じゃあ1つ目の質問。狼が非常に速いというが、その速さは普通の動物ではありえないレベルか？」

YES。動物ではありえませんか。

「動物ではありえない、か。2つ目の質問。その狼は神話や空想上の登場人物？」

NO。神話やファンタジー世界は関係ありません。

「うち。フェンリル狼とか、神話系の話だと思ったが。違うのか」

違います。

「しかし普通の動物ではありえないほど速い。……3つ目の質問。狼は実在する？」

YES。実在はします。

「む、実在するのか。しかし動物ではありえない。どういうことだ？ ……機械か？ CPU速度とか」

質問しますか？

「いや、たぶん違うから質問はしない。機械で『狼』もしくは『ウ

ルフ』と呼ばれる速いもので、かつ『常識的な』な存在を俺は知らない」

そうですか。

「あくまで答えは『常識の範囲内』なんだよな？ 特殊な知識は必要ないんだな？」

はい。そうです。

「なら聞く必要はない。もっと先に確認することはある。4つ目の質問。その狼は生きているか？」

NO。その狼は生命活動を行っていません。

「生きていない。実在する。いよいよ機械の可能性が濃くなったな。だが機械だとしても思いつくものがない。機械じゃないとする……。5つ目の質問。その狼の速さは、音速を超える？」

YES。素晴らしい質問です。

「ようやく尻尾を掴んだ。音速を超えらるということとは、もう光速しかありえない」

そうですね。

「だがもう1つ確認することがあるな。6つ目の質問。この話は日本語である必要がある？」

YES。またまた非常に良い質問です。

「日本語である必要がある、と。これで星座とかは除外できるな。なら最後は詰めだ。7つ目も質問。狼はひらがなで表記してもいい？」

NO。ダメです。もはや追い詰められましたね。ですがまだ負けたわけではありません。重要なことですので、狼の正体を紙に書いてください。口頭は不可です。

「まあそうだな。じゃあ答えを書くぞ」

『狼煙^{のろし}』

正解です。オオカミのケムリと書いて『狼煙^{のろし}』。狼煙は遠くの味方に敵襲などを伝えした。見れば伝わるので、つまりは光速です。速いですね。

「当たったか」

はい。しかしよく当てられましたね。

ところでこれも一応、光の速さで情報を伝達しますから光通信と読んでもよいのではないでしょうか？ 世界最古の光速インターフェイスです。

「違うだろ。いや、そういう意味でもとれるか？ まあどっちでも

いいや。なんとか切り抜けた。狼の速さについて詰められなければやばかった」

ほほほ。でもこれは運任せではありませんでしたよ。自信を持ちなさい。そして全裸になって仁王立ちしなさい。

「なんでだ？」

お嫌でしたら、前半部分だけで結構です。自信を持ちなさい。堂々としなさい。胸を張りなさい。包茎とて気にする必要はありません。日本人の2%は包茎です。

「……いつ包茎の話になった？ あとパーセンテージが少くないか？」

正式なデータを知らないもので。もしかしてごぞんじですか？ さすが。類は友を探すのが上手い。

「人聞きの悪い事を言うな！」

ほほほ。怒らないでくださいな。貴方を褒めたのですよ。この問題を正答できるとは、正直、思っておりませんでした。

「……ありがとよ」

では次は7問目。いよいよ最後の問題です。これを解ければ、貴方の願い事を一つ叶えて差し上げます。

「……この部屋を出たら死ぬんだよね？ 生きて出たい、とかでもいいんだよね？」

もちろんです。どんな願い事でも叶えて差し上げます。まあわたしに出来る範囲ですが。

「十分だ」

よろしい。では最終問題です。

7問目『部屋から出たら死ぬ少年』

最終問題です。ここまでできるとは思っておりませんでした。わたくし、出題前だというのに感動を抑え切れません。

「はやく問題を出せよ」

ちょっと乳首立ちそうです。触ってみます？

「はやく問題を出せ！」

ほほほ。長かったこの水平思考ゲームもこれでお終いなのです。もう少し会話を楽しみましょうよ。

「楽しむ気はない」

切ないお言葉ですね。ではルールの確認です。

「変更ないんだろ？」

はい。わたくしが問題を出し、貴方が7回質問をする。質問にはYES、NO、関係ないで答えます。もちろん嘘はつきません。最後に貴方は問題に解答する、と。

「すべて今までと同じだな」

では参ります。正解できれば晴れて、貴方の願いを1つ叶えて差し上げます。

「生きてここから出たい」

宜しい。願いが明確なのはよいことです。では問題です。

『少年が部屋にいます。彼は外に出ると死んでしまいます。状況を説明しなさい』

「この問題……。俺のことか？」

質問を使って聞いて欲しいのですが……。まあよいでしょう。そうですね。この問題は貴方のことです。

「やっぱり」

貴方もいい加減、自分の状況を知りたいでしょうし。せっかくですから、ご自分で答えてもらいましょう。

「状況を確認する。俺は眠る前まで、普通に高校に通う学生だった。目が覚めたら、見覚えのない部屋にいた。しかも首を手を持った、見覚えのない女、自称悪魔がいる。悪魔は部屋から出ると死ぬと俺に忠告した」

そうですね。現状認識に間違いはありません。

「このむちゃくちゃな状況を、7回質問しただけで答えろと言うのか？」

今の貴方ならば可能なはずです。ああ1つだけヒントを差し上げましょう。わたくしの存在、つまり悪魔の存在は関係ありません。超自然的な現象は起こっていませんよ。オカルトではなく、貴方の夢でもなく、全ては現実です。

「自分の存在がオカルトだって認めるんだな」

ほほほ。最終問題まで到達できた貴方への親愛のしるしです。では質問をどうぞ。

「オカルトは関係ないんだな？」

くだい。しつこい男は嫌われますよ。

「1つ目の質問。俺が寝ているうちに、世界で何らかの大規模災害が起こった」

いきなり核心に迫ろうとしますね。それでいて質問の幅は広い。良質な質問です。

「答えろよ」

NO。別に災害は起こっていません。外の世界は貴方が生きてきた通りの、2010年の日本です。

「災害じゃないのか。バイオハザードとか、大地震とか、宇宙人の侵略とかそういうのが起こったのかと思った」

映画の見すぎです。もしくはポルノ映画の見すぎです。

「見たことない！」

そりゃそうですね。高校生がポルノ映画を見たことあったら、わたくしもビックリです。言い直しましょう。エロ本の見すぎです。

「見たこと……あるけど。関係ないだろ！」

おや？　そういうえばそうですね。いったいいつ話がずれたんでしょう。

「知るか！　2つ目の質問。この部屋にはドア1つ。窓が1つ。床下に通じていそうな床下収納。天井裏に行けそうな天袋。パツと見ただけで4つは外に出る方法がある」

そうですね。

「そのどれから外に出ても俺は死ぬのか？」

YES。道は複数あり、そしてその全てが死に通じています。

「むう。部屋を出たら死ぬといったけど、まさか人間は寿命でいつか死ぬとか、そんな理由じゃないよな？」

……ギリギリ質問を使わなくてもいいレベルの疑問と判断します。お答えしましょう。そういう長い尺度の死ではなく、出た瞬間、即座に死にます。

「即死、か」

YES。そもそもわたくしが止める理由が、『この部屋から出たら寿命でいつか死にますよ』なんてのでしたら、ただの詐欺でしょう。

「それもそうか」

わたくしは嘘はつきません。それは信用してください。

「わかった。けど……状況が掴めない」

まだ2つしか質問を使ってませんよ。長考するには早いでしょう。

「かなり状況にムチャがある」

それはそうですね。

「はやく方向性だけでもわかっておかないと、最後の詰めで質問が足りなくなる」

なるほど。計画性はおありのようだ。

「足りなくなって、運任せになるのはもうごめんだ」

ほほほ。では運に任せない質問をお聞かせ願いますか？

「……これは俺が主人公の問題だ。この状況は俺が原因である可能性もある。でも俺は普通の学生。いや、金のない学生」

ほうほう。

「金がない……金が極めてない学生だ。オヤジからの仕送りが最近ない。事業が厳しいとも聞いた」

そうですか。身の上話は結構ですが、それで？

「3つ目の質問。もしかするともしかして。オヤジの事業と関係がある？」

エクセレント！ YES。非常に関係あります。驚きの質問ですよ。

「掴んだ。……正直掴みたくない事実だが、それでも真実を掴んだ。4つ目の質問。俺は既に多額の債務者か？」

YES。一生を費やしても絶対に返せない負債を貴方は抱えています。

「多額債務者か。泣きそうな状況だが、その事実と、俺の状況は『関係ない』わけじゃないんだな？」

はい。関係なければ、そう答えます。

「関係あるのか。5つ目の質問。俺がこの部屋にいと、オヤジの借金がチャラになる？」

NO。チャラにはなりません。少年の家族も含めて、ようやくチャラです。返せる人がいませんから。追伸。自己破産なんてぬるいことは考えませんように。

「ああ。ほぼ状況がつかめたよ。やはり早めに真実に辿り着けてよかった。これで細部まで質問できる」

それはよかった。

「でもこんなに嬉しくない真実は、今まで生きてきて初めてだ」

死にたいですか？ それならば、すぐさま外に出なさいな。すぐ貴方の望みが叶いますよ。

「断る。それでも俺は生きる！」

ほほほ。ならば知恵を使うより他無いでしょう。貴方の最後に残った財産です。質問の続きを聞きましょう。

「6つ目の質問。この部屋は監視カメラがあるか？」

YES。もちろんあります。わたくしは悪魔ですので、カメラには映りませんが。

「7つ目の質問。この部屋は非合法的な組織が運営する、娯楽の対象になっている？」

YES。さて状況がつかめましたか。多重債務者の少年。

「五月蠅い。俺は正解して、自由になる」

では、どうぞ。

『少年は、……俺はオヤジが事業に失敗して多額の借金を抱えて、その連帯責任を負わされている。返せない金額の負債を抱えた俺は、債権を持つ犯罪組織に拉致されて、この部屋に入れられた。部屋は一見すると安全。なにも情報がなく、部屋から出る方法はたくさんある。しかしどの方法でも対象者は陰惨な方法で殺され、それを監視カメラで見て楽しんでいる者たちがいる』

完璧です。ちなみにそのドアから出ると、ワイヤー線で首を切り落とされます。

「げ」

首を切り落とされると動脈から血液が噴出しますよ。見学者には最も好まれる、最も被害者が多い処刑方法です。

「普通はドアから出ようとするだろうからな。目覚めてわけのわからない部屋にいたら」

そうですね。ともかく7問の正解おめでとうございます。

「ありがとう」

とりわけ最後の問題。正解するには自分の絶望的な状況を正しく理解せねばならないのに、それを乗り越えて尚生きる希望を失わなかったのは感動しました。股間の疼きが止まりません。

「ああ。そうか」

股間の疼きが……。

「2回言うな！ それじゃあ早速……」

ベットインですね。

「……どうすれば無事に出られる？」

おお。無視ですか。寂しさで兎こと、バニーちゃんは死んでしま
いそうです。

「お前を真面目に相手すると疲れる」

ほほほ。寂しいことをおっしゃる。

「とにかく俺の願いは、無事にここから出ることだ。願いを叶えて
くれ」

ではお答えしましょう。この部屋を出るには、死ぬしかありませ
ん。それがこの『自己処刑の個室』のルールです。

「おい！」

ただし。たった1つだけ生きて出られる方法があります。この死
亡理由であれば、時間が掛かりすぎるという理由で免除されるので
す。

「どんなのだ？」

餓死です。飲まず食わずで、水すらとらずに人間が耐え切れる時間は短いです。

「そうだな」

ただしこの娯楽を眺めている人々の忍耐力は、それよりもずっと短い。

「うん」

おそらくは2日。水なしだとかなり厳しいですが、貴方は健康そうだし死ぬことはないでしょう。

部屋から出ようとせずに耐えれば、組織も折れるはずですよ。

「なるほど」

誰もやったことがないので2人目も許されるかは不明ですが、少なくとも初回のみは確実に免除されるでしょう。

「おお！」

負債はこの部屋に入った段階で免除されているので……というか戸籍がなくなっているのもはや借金に負われる心配はなくなります。

「戸籍、ないのか」

不便でしょうが、とりあえず生きてここから出られますよ。

「贅沢も言っていられないか。わかった。ありがとう」

こちらこそ、なかなか楽しかったですよ。

「……ところで、なんでお前はこんなに親切なんだ？」

ほほほ。遊びですよ。たまたまです。

「そうか」

……嘘ですよ。初めて嘘を言いました。

「なんだよ。どっちなんだ？」

ほほほ。さて、どっちでしょうか？ 興味がありますか？

「まあ助けてもらったわけだし。多少はある」

……天使と悪魔。貴方はどうやって生まれるか、ご存知ですか？

「話が飛ぶな。知らないよ。知ってる奴っているのか？」

天寿を全うして死に、世界を良い方向に導きたい者は天使になります。

「ふーん」

逆に面白半分に殺されて、世界を悪い方向に導きたい者は悪魔になるのです。

「なるほど。お前は世界を悪くしたいのか？」

はい。この世界を邪悪に染めることがわたくしの使命です。

「それが、俺を助けてくれるのとどんな関係がある？」

ほほほ。結論を急ぎますね。そんなに知りたいですか？

「まあ助けてもらったし。多少は」

……ではわたくしから、最後の問題です。

最終問題『悪魔の目的は?』

ほほほ。では今度こそ最後の問題です。ルールは今までとすべて同じです。

「わかった。好奇心のみだけど、余興として楽しもう」

……けっこうです。この問題を持って、わたくしと貴方の関係に終止符を打ちましょう。

「なにか関係あったか? 初対面だろ」

ほほほ。つれなくお言葉です。そして切ないお返事です。でもわたくしは負けません。

「いいけど。早く問題を出せよ」

承知しました。では問題です。

『わたくしは悪魔なのに、なぜ貴方を助けたのでしょうか?』

「前提条件を確認するための質問だ。悪魔は面白半分に殺された人間が、世界を今より悪くしたいと願えばなるんだよね?」

はい。先ほどお話した通りです。

「これが理由なら簡単だが……。1つ目の質問。俺が生きていると、世界は今より悪くなる？」

ほほほ。自虐的な考えですね。しかし確かにそうならば、わたくしが貴方の命を助ける十分な理由になりえます。

「だろう？」

ですが答えはNOです。貴方にそんな世界を動かすほどの力はありません。

「違うか。ちょっと自分を過大評価した」

現時点の貴方は、ただの戸籍のない高校中退の少年です。将来はどうか知りませんが、わたくしの関知する事でもありません。

「わかった。なら2つ目の質問。俺を助けたのは、悪魔の仕事とは別の理由がある？」

YES。貴方らしくありませんね。1つ目の質問で、これがYESなのはわかっていたでしょう。

「ん。まあ、そうか。でも余興だから、あんまり細かく気にしなかった」

なんと。もっとわたくしに興味を持ってください。わたくしは貴方の命を救ったのですよ。

「それはそうだが。悪魔だし」

職業差別ですね。悪い人だ。

「職業じゃないだろ。まあいいさ。とにかく理由を考えよう」

真剣みが足りませんね。

「真剣じゃないからな。3つ目の質問。俺を救ってくれた理由は、お前は俺が好きだから？」

YES。投げやりに言いましたが、ビンゴです。

「当たったか」

よくわかりましたね。

「妙にセックスアピールするからな。もしかしてと思ったが」

ほほほ。嬉しいですか？

「……かなり微妙」

ほほほ……わたくしの心は切なさが嵐のようですよ。

「そんなこと言われてもな。悪魔に好かれても、素直に喜べない。そもそもお前に出会ったのは、今日が初めてなんだし」

一目惚れを、信じますか？

「米の銘柄か？」

……もういいです。

「すまん。ちょっと言い過ぎた。仮にも命の恩人だ」

仮、ではないでしょう。

「ああ。命の恩人だ。じゃあ俺のことが好きだったから、助けようとしたのか？」

おっと、同じ質問ですね。ホントに集中力がない。

「あ、そうだったか」

まあ今回は特別にオマケします。

「別にオマケしなくてもいいが。余興だし」

そうおっしゃらずに。答えはYESです。わたくしは貴方が大好きだから、助けようと思いました。

「問題を間違えたら7等分に分けて殺すとか言ってたよな？」

ほほほ。他の人間に面白半分に殺されるくらいなら、わたくしの手でと。わたくしなりの愛情ですよ。

「理解しがたい……。つまりお前の個人的趣味で助けてくれたのか？」

はい。何度も聞きますね。

「その……ありがとう。きちんとお礼は言っておく」

ほほほ。素直な少年は大好きですよ。童貞で短小なものも大目に見ます。

「うっさい。あと、悪いけどその好意には答えられない。俺は人間が好きなんだ」

それは残念。

「でだ。もう答えがわかったな」

それは素晴らしい。お聞かせ願いますか？

「聞かせるの何も……いや。せっかくだから、あと4回の質問は使わせてもらおうか」

ほほほ。またしてもわたくしを勝つのですね。そのサド気質は、ますます好きになってしまいそうです。

「悪魔と話す機会なんて、もうないだろうしな」

そうですか。ではご存分に質問を。

「悪魔は人間が面白半分に殺されるとなるんだったか？」

はい。

「じゃあ4つ目の質問。もしかしてお前もここで殺されたとか？」

YES。わたくしもここで死にました。正確には2時間前。

「はあ?! 2時間前だと!？」

おっと、初めて聞くほどの大声ですね。声帯壊れませんでした?

「2時間前ってことは。お前はちよっと前まで人間だったのか?」

それは質問ですか?

「ああ。5つ目の質問。2時間前まではお前は人間だった?」

YES。わたくしこう見えて、悪魔なりたてです。

「ちよっとまで。2時間前まで人間だった奴が、俺を好きってことか?」

ほほほ。お恥ずかしい。

「恥ずかしいって……。俺はお前を知らないぞ。人間だった時の名前は?」

質問はYESかNOで答えられるようにしてください。

「おい! これは余興だろ。教えてくれてもいいだろう」

だめです。

「わかった推理する。ええと、お前は……もしかしてストーカー？」

ほほほ。質問しますか？

「……やめとく。たぶん違うし。俺はこれまでの生活で、ストーカーの雰囲気を感じたこともない」

そうですか。

「どういうことだ？ あと質問は2つか。くそ、もっとしっかり質問を吟味するべきだった」

後悔先に立たず、ですね。

「くそ。……俺はそれほど美男子じゃないし、スポーツマンでもない。女にモテたことは記憶にはない。ストーカー被害にもあってない」

普通の高校生でしたからね。

「でもお前は俺のことが好きなんだな？ あ、質問じゃなくて、確認だぞ？」

好きです。愛というよりも、深い好意と表現した方が正しいですが。

「深い好意か。……ちょっと待て、お前さっき「普通の高校生でしたからね」と言ったな？」

おっと。これはしくじりましたか？　はい、言いましたよ。

「お前は嘘をつかないんだよね？」

はい。

「だとすると、お前は人間だった時に、俺を詳しく知っている人物なわけだな」

ほほほ。そうなりますね。ようやく頭が回ってきたようだ。余興、面白くなってきましたか？

「ああ。楽しい以上に、後悔で一杯だ。つまらない質問を使いすぎた。6つ目の質問。俺はお前を知らないが、知らなくてはならない間柄であった？」

YES。よくそんな微妙な質問を思いつきましたね。

「……理由は分からない。分からないが、もうこれしか思いつかない。まるっきりオカルトだ。でも問題がオカルトかを確かめる質問数もない。ああ、もっと慎重に聞いておくべきだった」

これからはもっと慎重に生きるのですね。わたくしからの忠告です。あなたはもう、その頭脳しか財産がないのですから。

「そうだ。その通りだ。肝に銘じてたはずなのに、第一歩目から踏み外した」

残念でした。

「でも諦めん。……7つ目の質問。最後の質問だ」

どうぞ。

「人間が悪魔になると、人間の方に、悪魔になった者への記憶がなくなる？」

ほほほ、ピンポイントで聞きましたね。あなたは、自分の記憶がなくなったとお疑いですか？

「オカルトだが、そうとしか思えない」

ほほほ。訂正しましょう。貴方はその頭脳に加えて、かなりの勘の良さも持っているようだ。大切になさい。

「答えは？」

YESです。2時間前までわたくしと貴方は、とても親しい間柄だったんですよ。

「……お前と俺が？ 正直、一度見たら絶対忘れないキャラクターだと思うが」

それでも覚えていない。それが悪魔になるというルールです。貴方は覚えてもいないかもしれませんが、わたくしはよく覚えております。

「お前は誰なんだ？」

わたくしの事を誰も覚えていないと悲しく思っております。で

もわたくしを覚えていないことに、たった一人でも気付いてくれた。それがわたくしは嬉しい。

「お前は、誰なんだ？」

ほほほ。貴方との仲はあまり良くはありませんでしたよ。性格的に合いませんでしたし。でも大切な時に、いつも守ってもらっていました。最後に少しだけお返しが出来ましたね。

「お前は誰なんだ？」

ドアからは決して出ないように。わたくしのように、首を落とされてしまいますから。

「お前は誰なんだ？」

それでは、さようならです。わたくしは悪魔として、この世界のより多くの者に不幸と背徳をお届けする義務があります。

「誰なんだ、頼むから教えてくれ、姉さん！」

！？

「?????? あれ？ 俺は今、なんて言った？」

……ほほほ。記憶はなくなるはずなのに。意外といい加減ですね。まあ悪魔が一度だけとはいえ命を救えたのですから、世界はいい加減に出来ているのかもしれませんが。

しかしルール違反はいけません。あるべき姿に戻しましょう。

「……あれ？ お前は、誰だ？」

ほほほ。はじめまして。わたくしは不幸と背徳を司る悪魔です。

「げ」

怯えずとも結構。挨拶をただけです。もう一生お会いしないことを楽しみにしております。

「……………消えた？ なんだったんだ。あいつは。首を手にとって。気持ち悪い。ああ、そうだ。なんとかここで2日くらい我慢すれば、無事に出られる。戸籍はないし無一文だけれど、現在日本で飢え死にすることはないだろう。俺の気力と知恵があればなんとかなるとりあえずは、生きて出ることだ」

ほほほ

「それにしてもさっきの奴はなんだろう」

ほほ

「悪魔、とかいったか？ 幻覚かな」

ほ

「くそ、しっかりしろよ俺。これからは天涯孤独の身だ。頼れるものなんて、何もないんだからな」

最終問題『悪魔の目的は?』(後書き)

《注意》これは本編とは関係ないほんとの『後書き』です。

どうも蟬ノ河です。後書きまで足を運んでいただいてありがとうございます。

『悪魔と水平思考』これにて完結です。

まともな水平思考推理ゲームの問題は7つ。いくつ解けたでしょうか?

そしてそれ以上に気になるのは、これは問題として成り立っていたでしょうか?

成り立っていなかったらすいません。(笑)

反省点は多すぎるほど多いのですが……。悪魔の性格設定を下ネタ好きにしすぎた事は置いておきましょう(笑)

彼女の必ず下ネタに走る傾向は、書いてて面白かったです。

むしろ少年の設定が薄すぎました。これは反省してます。

ただ悪魔との対比で、少年までキャラが濃いと、もはや肝心の『水平思考推理』部分が薄くなってしまいうジレンマを抱えつつ……。

モノを書くのは難しいです。

最後に。最終話まで読んでいただいた方へ。

拙い文章でしたが、最後まで付き合っていていただいてありがとうございます。

悪魔と水平思考はこれでお終いですが、別のお話を書いていきます。それではまた別のお話で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4295/>

悪魔と水平思考

2011年7月29日19時42分発行